

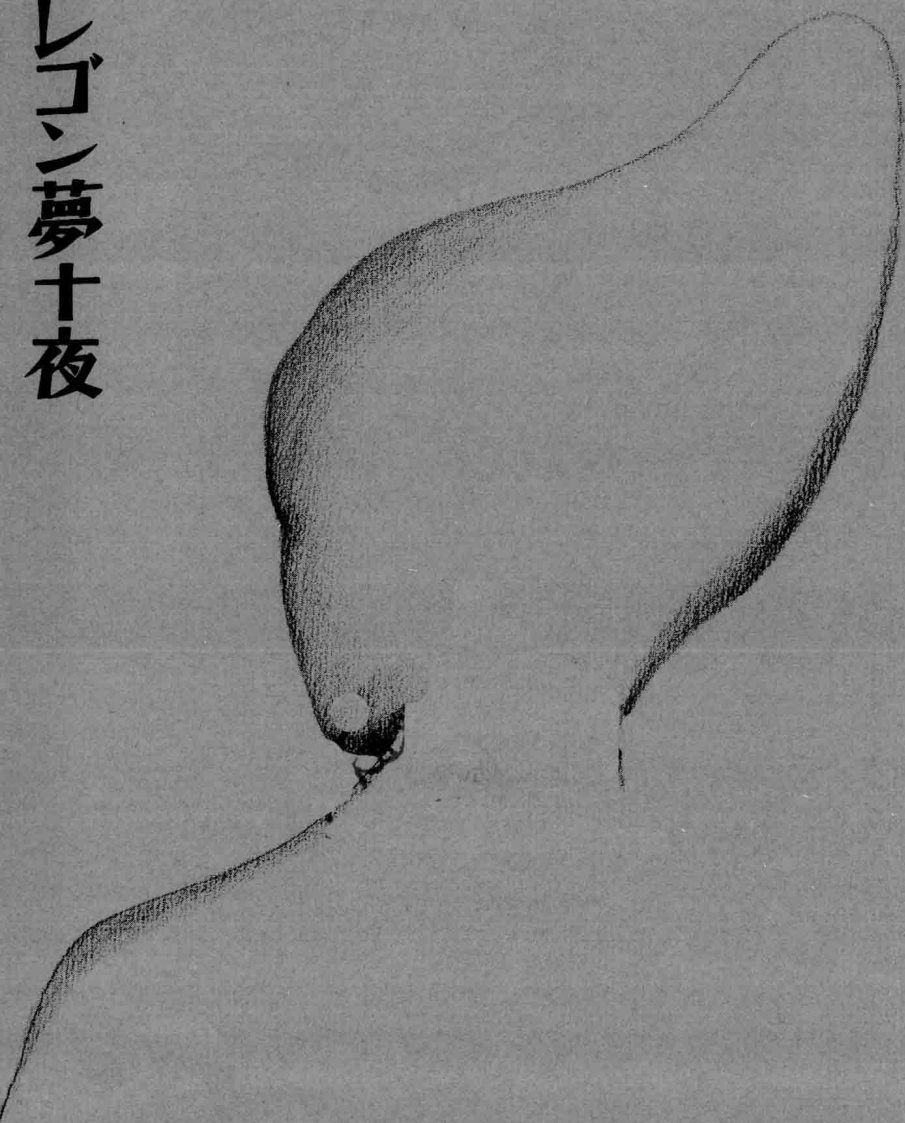
大庭みな子

オレゴン夢十夜



大庭みな子

オレゴン夢十夜



新潮社



オレゴン夢十夜^{ゆめじゅうや}

昭和五十五年十二月一日 印刷
昭和五十五年十二月五日 発行

定価八三〇円

著者 おお庭みな子

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

〒102 東京都新宿区矢来町71
電話 編集部 03(266)5111
編集部 03(266)5411
振替東京 四一八〇八番

印刷 株式会社金羊社
製本 大日製本株式会社

© by Minako Ohba 1980 Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

河	落	何	む	電	と	言	木	再	他
		処	く		ん		の		人
		へ	ろ	話	ぼ	葉	国	会	の
	葉		じ						部
									屋
175	155	137	112	92	75	60	37	20	5

装
幀
公
司
修

オレゴン夢十夜

他人の部屋

一九七九年九月二十九日 台風らしき雨

からだを海老のように歪めたり、肩の上で首をねじったり、脚を横にぶざまに折りまげてみたりするが、どうにも苦しい。

ぎっしりと満席の機内の人たちはみんな薄いシャツ一枚で暑がっているのに、ひどく寒い。歯がかちかち鳴り、震えがくるほどだ。熱が出て来たらしいと思い、スチュアデスにアスピリンを頼むと、「アスピリンは鎮痛剤でございます、どちらかがお痛みで」と言う。

「風邪らしいですが」

と答えると、違う風邪薬を持ってきてくれる。私は薬嫌いで、たまにアスピリンを飲むくらいなので、変った薬は飲みたくないが、とにかく貰っておき、「やはりアスピリンも欲しいのです」と言うとはんな顔をする。とにかく、からだの中をかきまわして、発汗させたい。それでも不承不承持つて来てくれたので、それを呑みこむ。

九度以上はあるに違いない。

東京からJALでサンフランシスコに向っている。

なんだってこんなに満席なのだろう。石油不足で、飛行機の便数を減らしている上に、円高で、日本人の旅客はひきもきらぬということなのか。

ゆうべはどうしても出席しなければならぬ会があつて、遅く帰宅し、そのあと寝つきが悪く、ところと眠つたのは朝方だった。

それから大急ぎで、スーツケースにいい加減に思いついたものだけ放り込み、いくつかの日本の住所を手帖に書き入れ、必要な書類をチェックし、所持金をかき集めて突っこみ、三ヵ月余り留守にする机の上を片づけたりした。

二十年前、生まれて初めて外国に出かけるときはどんなだったか。何ヵ月も前からそわそわと、あれやこれや用意万端整えた。用意万端？ そんなことは金輪際できっこないのに——でも、とにかく、そう努力した。

ところが、今ではいつもこのさまだ。それでも此の度は今日立つことが大分前から分つていたから仕事の上で必要なものだけはあらかじめ送っておいたからまだよい。仕事でなければ、急に数日前に思い立ってぎりぎりまで仕事をしてぶいと立つというような外国への旅を少なくとも一、二年に一回はしている。いったい、何のために、外国に出かけるのだろう。いったい何のために？

突然、自分が暗い穴の中にいて、何も見えなくなるのに気づくからだ。空も見えない。水の涸れた深い井戸の中に落ちこんでいるような気分になる。しめった羊歯や苔がまわりに生えていて、自分の皮膚にまで痒い苔が生えている。ぼろぼろと表皮がめくれて、赤く血が滲み、立ちあがると、骨が硬ばって、軀の中で血がよく流れない。

こうしていることは安全なのだろうか。まわりに繁っている苔と羊歯は、むしって口に入れれば、食べられる。味はよくわからないが、不思議な苔だ。きつと、宇宙旅行の携帯食品もこんなものだろう。葉の裏にぶつぶつ黄色い胞子のついたものであったり、なめらかなビロードのよう

なものであったり、ぬるぬるした茸の傘のようなものであったりする違いはある。

今朝、目が醒めて何を食べたのだった。貰いもののイクラに、高野豆腐に、こんにやくとあまり上等でない牛肉を煮たのと何か食べた。手伝いの者は来ない日で、いい加減に自分で煮たのだ。あるものをお鍋に放りこみ、およそ繊細な心配りのない、料理とは言えない代ものだった。

夫がお茶など入れてくれた。

彼はスーツケースの鍵をかけてくれた。それから、辞退したのに成田まで来てくれた。私が「来てくれる?」と言ったのだそうだ。そんなことを言ったかしら。言った覚えはない。まるで夢遊病者みたいだ。

「三ヵ月も放っておおきになるの、旦那さまを」

「お留守中はどうなさるんで?」

「お寂しいですねえ」

いろんな人たちが、私にとっては意味がないと思えるいろんな質問をした。何と答えただろう。

「ええ、馴れてますから」

「どうするって、子供というわけでもないの、何とか独りでやれるでしょう。」

あなた、男の方が長く留守するときも、奥さまに同じようにお訊きになるの」

焦点を合わせようとして、いらいらした答を返した。もちろん、長年馴れている者同士が一緒にいるのはいくことも多いだろう。馴れれば気にならない? いや、馴れたものがないと物忘れしたような気がする? 実際的に便利だからということとは、どこかでお互いに犠牲を支払って相手に便利を与えているということだ。どこかで気にしている。気にし合っている。

しかし、その馴れた男だって、もしかしたら、べつの穴の中にいるかもしれないのだ。彼の穴

のまわりにはべつの種類の苔が生えているかもしれない。ときどきは同じ苔を分け合って食べていることもあるのだろうか。

行くな、とも言わないから、彼もやはり、妻が行くのは当然だと思っている。

彼は出かける前に何と言ったっけ。覚えていない。おいおい時間をかけてゆっくり思ひ出すことにしよう。何しろ、二十数年ぶりに日記をつけてみようと思っている。二十数年前、それまで丹念につけていた日記を船の上から海の中に捨てて以来だ。

今も海の底で、蒼い頁が風に舞うようにめくれ上っているのが見える。落ちて行くときはひらめく白い頁が見えたが、水に濡れたら、はりついてインキがにじみ、書かれた文字は消えてしまったのだろうか。

どうしてあるとき、日記を海に捨てたのだろうか。多分失恋したからだ。何となく思わせぶりなことをしてみたい年頃だった。目の前に臥よこたわっている時間も、過ぎた時間も無意味なものに思えて、それまでに呟いた言葉の数々を紙屑のように丸めて海の中に捨ててしまったかったのだ。

いったい、捨てれば消えるとも思っていたのか。それとも、それまでに呟いた言葉は、自分だけのものだとも思っていたのかしら。

それ以来日記を書かない。しかし代りに小説を書き始めた。あるとき、はっと気づいた自分というものの所在の不確かさが、日記という形式を拒否したのだ。

今、かりに、日記らしきものをつけ始めたとしても、恐らくそれは長くは続かない。いつの間にか、何かべつのものになってしまふだろう。

まあ、それはそれでよい。もうすでにそうになっている？

再び九月二十九日か？

九月二十九日が大方二日ある。なぜなら東京とサンフランシスコとの間に十七時間時差があったからだ。人間とは何と妙なとり決めをすることか。

サンフランシスコの入国手続きにはうんざりするほど待たされた。いちいち、厚いファイルを繰って何か調べている。仕方がない。彼らだって好きでこの仕事をやっているわけでもないのだから。いや、いつの間にか好きになってしまっているのかな。

いつもいつも同じことをやっているうちに、ほんのときたま少し違うことが見つかりはしないかと、それだけが生甲斐になるということもある。とすれば、私の番がまわって来たところで、彼らに突然、そんな生甲斐が閃きませんように。いや、もしかしたら、閃いたほうが面白いかもしれない。私がわけもわからずに、どこかへ連行され、あげくの果に牢屋に入れられたりしたら、——そんなことになったら、ユージンなどという大学町に行くよりはずっと面白そうだし、さか殺しはしないだろう。いや、殺されることだってあり得るかしら。

そのうち番が来て、役人は仔細らしい顔で先方の大学からの書類を読み、査証印を調べ、写真を見くらべ、簡単にパスポートを返してくれた。

荷物のとり調べはなかった。ここで二時間ほど待って飛行機を乗り継ぐので、荷物をそのままそこに置き、ユナイテッド航空で搭乗券を貰い、それから、歩くと十五分かかるというので、巡回バスみたいなに乗って搭乗ゲイトまで行き、手荷物を危険品がないか調べられ、成田のときと同じくピーッとへんな音がして、またもう一度調べられ、係員は傘をかざして金属らしき骨をさわって、申しわけに、あちこちのぞく真似をし、肩をすくめ、私も肩をすくめ、二時間前なの

でまだ誰も来ていない、がらんとしたプラスチックの椅子を三つ占領して、行路病者のように横になる。

どうにも立ってられないほど疲労している。熱は下ったようだが、からだじゅうの氣力が抜け、衛生室を探す元氣もない。

行き倒れになったら困るから、きれいな下着をいつも着ているようにと、母親のような注意をする夫の言葉を思い出しながら、ひとつひとつの椅子が湾曲しているためにからだのあちこちが痛いのを耐えて、寝ていた。

むかし、学生時代、講義を聞きながら、あまりの睡さに耐えられず、長椅子に横になって眠り、肝をかいて脇の友人に突つかれたものだ。そんなお行儀の悪い学生はさすがに一人もいなくて、私はその行為によって学校で有名だった。

しかし、私は決して先生を軽蔑していたわけではない。心の中で詫びながら、今、横になって眠らなければ死んでしまうと思い、寝ていた。どうしてそんなに疲れたのだろう。いつだったか、あんまり疲れて、夜半にひきつけめいて震えが来たことがあった。ゆうべの熱もそんなものだったかもしれない。齡をとったので、きっと震え方もいくらかおだやかになっただけなのだ。

やっと飛行機の中に入れてくれる時間になり、また眠った。途中で配られた黒パンのサンドイッチを少しかじって、オレンジジュースを飲み、うとうとするうちにやっとユージンに着いた。ステイヴが迎えに出てくれている。彼は私の作品の英訳者で（まだ出版されていない）、私をオレゴン州ユージンにあるオレゴン大学に迎える手筈を整えてくれた人だ。

私たちが日本語で喋っていると、まわりの人たちが珍しそうに見る。土曜日なので、帰省の学生らしいのが、うすよごれたシャツにジーンズ、リュックという世界中どこでも見なれた服装で

大勢たむろしている。中には彼に挨拶する学生もいる。

人口十万余りの大学町だから、大学の先生をしていれば、顔見知りの者も多いのだろう。私はもう倒れそうなほど疲れていたので、あまり口も利く気にならず、「どうも」と言い、少し気分が悪いからと荷物が来るまで坐りこんでいた。

彼は何か月も前から走りまわってアパートメントをみつめてくれたり、私を迎える用意で大変だったのだから、もっと何か言わなければならないと思うが、口がものを言ってくれない。アパートメントには陽子と良子がシャンプンを用意して待っていてくれたが、私は着くなり、ばたんと倒れるように、ベッドに横になった。

九月三十日 晴 摂氏二十度くらいか？

ボタンと倒れるようにして十時間眠ったら、やっと気分がよくなった。
すがすがしい朝。木の匂いがある。

ステイヴが走りまわって私のために見付けておいてくれたアパートの中を歩きまわる。リビング・キッチン——十五、六畳か？——すりきれたソファと肘掛椅子、サイドテーブルが三つ、ティーテーブル、ステレオ、本棚。小さなベランダがついている。部屋の中のサイドテーブルに観葉植物が五鉢ばかり。

寝室は八畳ぐらいか。ダブルベッドに机、本棚があり、本棚は三段ばかり、机の抽出しもいくつか使えるように空けてある。

部屋の片隅に、衣装箱が積み重ねてあり、押入れのハンガーも使えるように半分くらいあけて

ある。留守の間を人に貸すように充分用意した家主の心遣いが嬉しい。

台所の器具、バス・ルームの具合など点検し、アイロンや洗濯機、ごみ捨場など見る。キッチンには立派なオーブンや皿洗機もあるが多分使わないだろう。

三ヵ月くらい、ホテル住いだって構わないとも思ったが、どうせ大学に行くなら、学生たちと喋るためにはかえって寄宿舎のようなところがよいかもしれないと思い、そう頼んだのだが寄宿舎はあいていないとのこと。むかし、寄宿舎暮らしが長かったので、なんとなくつかしのだが、このとしになってそういう暮らし方は無理だろうというのが、一般の人たちの考えのようである。「そんなところじゃ、うるさくて仕事ができませんよ。彼らはせいっぱいの音量でロックミュージックを鳴らしますよ。」

キャンパス附近というお話でしたけど、キャンパス附近は寄宿舎と大してかわりません。学生下宿か、学生たちが共同で借りている借家ばかりだし、きたなくて、騒がしく、その上、少なくとも一年契約です。

でもここなら、キャンパスから少し離れていて、町の上中級住宅地だし、静かで、スーパーマーケットは歩いて五分、大学までバスで十分、歩いて四十分くらいかな——安全で、それにまわりは大学関係の人たちが多くて何かと便利です。

あなたは書く方ですから、静かで落ちついた雰囲気を第一条件に探しました。お一人だから、とくべつ広い必要はないと思い、丁度、三ヵ月留守にする知り合いの学生がいましたので、寄宿舎でもよいとおっしゃるくらいだからどうかかなと思って話してみました。あなたがその間の家賃を払って下されば、彼女としても大助かりというわけです。

お食事は御自分でなさるのが面倒なら、外食なさってもよいし、まあ、御自分でなさるつもり

なら、できますよ。彼女は自炊していましたから」

ステイヴは言った。

アメリカの家庭はなつかしくもあるが、大方わかつている感じもあるし、また短期間のこんな立場では奥さんたちと普通の付き合い方をすることは不可能にも思え、いっそ若い世代との気のおけない話の中にいるほうがよいという気持ちで、部屋の中を見まわす。

そのとき、良子から電話がかかって来て、

「どおお、よくお眠りになった。お部屋の具合どうかしら。ステイヴがそりゃ大変だったのよ。みな子さんに気に入るかどうかって、壁紙の色からベッドカヴァーの具合まで気にしてたわよ」
とても気に入った、落ち着いて仕事ができそうだと答えると、ではさしあたって、買物などが困るだろうから、午後、近くのスーパーマーケットまで自分も出かけるから、ひとわたり見て、一週間分だけでも必要な当座のものを買い整えたらよからうと言う。

アメリカの主婦たちは、週に一度日用品、食品の買い入れをするというのが多く、夕食時に毎日のものを買い出しに出かけるといったやり方をする人はほとんどいない。

肉や野菜は売る方でも、そうした買い方を念頭に入れて包装している。もともと日本でも最近ではそういうやり方をする人が多くなった様だが、それでも、週に一度しか買物をしないという主婦は少なく、夕方なんとなく何軒かの店を覗き、日によって入荷される品も違う野菜や魚を選んで食卓を賑わすといった女たちの心づかいがあるが、この国でそんな贅沢なことをする女はあまりいないし、男の方もそれを期待していないのではないか。すべて、買い置いたもので、計画的に日々のメニューはつくられる。

私は結婚以来、アメリカ風の家庭の主婦たちのやり方に馴らされてしまい、今は日本に住んで

いるが、そのどっちつかずの暮らし方をしている。しかし事実上、最近ほとんど家庭的な雰囲気
を失った学生暮らしに近いやり方をしているので、突然、こういうところに来て、とくべつのや
り方に切り替えるわけでもない。アメリカを去ってもう十年になるから、店の商品ややり方も変
っているかもしれないと思い、良子と一緒に買物することにする。

「私はどっちも毎週土曜日の午前中、買物をしますから、そのときお誘いします」

と良子は言ってくれ、車があれば助かると好意に甘えることにする。

スティヴの妻は大学の病院で検査員として働いていて、夫の招いた客を個人的に面倒を見る
ほどのひまも無さそうだし、家も良子より遠いので、良子の親切は有難い。

スティヴの英訳は良子と共訳で、私を大学に招くことについては彼らが万端整えてくれ、私
は何もしなかった。何年前か、

「いつか、来て下さるおつもりがおありでしょうか」

とスティヴが言うのに、何げなしに、

「ええ、まあ、気楽な機会があれば」

と言ったことを覚えていてくれて、スティヴが申請したらしい。ある日突然、国際交流基金
から電話がかかって来て、びっくりしたのだが、大都会に住んでいるのだから、数ヵ月、大陸の
森の中で暮してみるのも悪くはないと、出て来る気持になった。

オレゴン州には、この町ではないが、以前、クース・ベイという海辺の町に一夏過したことが
あり、何れ心づもりのある作品に密着したイメージのあるところで、作品の舞台としての取材の
意味もある。

良子が来るまで少し時間があるので、本棚の本など見る。